

教育課程企画特別部会における幼児教育に焦点化した主な意見

1. 幼児教育の教育内容や指導方法等について

- 非認知的能力の議論は、情意面や主体的に学ぶ態度面に関わる中核的な議論。意欲の問題とともに、感情のコントロールや意思力なども含めて考えるべき。
- 幼児教育における評価は、一人一人のよさを引き出していくという視点から、年度当初と比較して何が伸びているかを評価し、指導要録等に記述している。そういった記述をよりきめ細かく、どういう指導の下で、どういう発達が見られ、今、どういう状況にあるのかということなどを次の指導者に伝え、子供たちの発達の連続性を保障するようなものが必要である。
- 幼児教育における評価については、ポートフォリオに近いが、作品例を含めた質的な記述を教師同士で共有し、更に子供とも共有した上で、教師が指導計画を改善し、また子供自身はその改善の一翼を担うという考え方。記述し、共有し、改善するという新たな評価の考え方を検討していただきたい。
- 子供たちが学ぶ喜びをしっかりと体験できるためには、先生や友達と一緒に活動することが楽しいとか、そこで自分の意見を発表して、それを受け入れてもらい、相手の意見を聞きながらさらに自分の考えを深めるなどということ、幼児期の学校教育の中で体験していくことがとても大事。学ぶ喜びと身に付ける力は常にセットである。そのために、子供たちが今身に付けようとしている力に対して、しっかり理解しながら、一緒に育つことを支える、という関係をいかに家庭との連携という形で作っていくかは幼児期の課題。特に幼児期は、認定こども園や幼稚園、保育園など多様化する中で、保護者をしっかり育てるということを考えていかななくてはならない。
- 学力以前に、就学前の段階から学習レディネス(教育や学習が効果的に行われる発達素地)を見つけさせることが重要。発達障害と診断されていなくても、発達に偏りがあったり環境的な要因などから学習レディネスが十分に育っていないという子供たちは決して少なくない。現状では、学習レディネス段階でつまずいてきた子供たちは、本人や家庭に問題があるなどというような理解のされ方をし、結果教育現場では放置され、学校という枠組みを出た後に不応症を起こしてしまうケースが非常に多かった。学習レディネスの観点に立てば、体がしっかり使える、粗大運動や協調運動ができたり巧緻性がある、音韻の理解や音韻の操作ができるといった学習の土台を作った上で、やっと教科教育を学ぶ土台ができることになる。同時に規範意識も育てることも大事。それらを学習の多様性を踏まえて指導しながら、同じく学習スタイルの多様性と個々の発達を踏まえてリスク要因を少しでも下げて保護要因を少しでも準備する。そういった視点で段階を踏んで系統的に指導していかないと成果は上がりづらい。いきなり社会性や問題解決するスキルを付けようとしても、定着する子は定着し、定着しない子は定着しないというこれまでと同じ現象が起きてしまう。また、メタ認

知を強化しなければセルフモニタリング力もセルフコントロール力もつかない。

- 時代が変わったために失ってきた部分が少なからずあるのではないかと考えており、それが青少年の問題行動などにもつながっていると思う。例えば人間性とか、日本人としての美徳とか、そういった変えてはいけないものをもう一度確認しておく必要がある。幼稚園や小学校などの将来に向けての基準作りの時期、善い悪いの判断をするためのものさしをしつけによって教えていく時期に、学校教育と家庭教育のかい離によりこれがなされないと、そこから知識や教養を与えていこうと思っても、土台がなくて上に積み上げていくことができるのかという危惧を持っている。日本人としてのアイデンティティとか、自分たちが何かというものをしっかり持っていなければ戦っていけないのに、外にばかり目を向けて戦っている。アクティブ・ラーニングというのがやはりとは言わないが、つい人間とは新しいことが出てくると、そちらにばかり目がいってしまう傾向があるので、基礎的なところをもう一度確認していただきたいと思う。
- 社会の変化に合わせた学校体育・保健の在り方が重要。公園でボールを使って遊べない現状では、学校体育で運動する時間をある程度確保してあげないと、生活の中で運動や体力づくりの時間が確保できない時代になっている。また、体づくりや運動能力の獲得というのは、幼・小・中・高と連携して行っていくことが重要。小さい子供は、脳から指令を出したことが体にうまく伝わらずまっすぐ走れないが、神経系の発達に応じた運動環境を整えてあげることによって育ってくる。そこが抜けてしまうと、後でやろうと思ってもなかなか獲得できない。
- 各教科等の科目の見直しというところに幼児教育の内容がないが、学校段階ごとの見直しをしていくと、幼・小・中・高の並びの中で幼児教育についても連続して見直していかなくてはいけない内容もあり、今の子供の育ちの実情を踏まえて是非幼児期に体験しておかなくてはいけないこともあるため、幼児教育における教育内容の見直しにも言及していただきたい。
- 日本語はもちろん重要だが、早くから外国語に慣れ親しむことで有利となることもある。外国語を幼児期に理屈抜きで身に付けることによって、英語的な物の考え方の修得と結びつくのではないか。
- 英語教育について、幼小の子供を持つ母親の周りには教材の情報が溢れている。英語を小学校で教科化するという議論の前に、家庭の中でいろいろな取組が既になされており、中学入学時に相当の差が付いているということも前提にしたクラス運営、授業運営を検討する必要がある。学校教育の中だけで教育のプロセスを議論しても十分ではない。

2. 幼児教育と小学校教育の接続について

- 幼児教育の質を高めることと、幼と小のカリキュラムのつながり方が重要。幼と小の教育課程の考え方やその編成にはそれぞれ尊重すべき違いがあり、発達段階に応じつつ、一貫し

ていくことが重要。内容の「前倒し」ではなく「積み上げ」になるような形で議論していきたい。

- 年齢差を気にせずに議論ができるのが普通の社会であるが、小学校の6～12歳は発達段階が目まぐるしく、どこに視点を置くかが難しい。「小学校」という大きなくくりだけではなく、幼小や小中などの校種間の接続・連携も含め、細やかに見て議論したい。
- 幼・小・中・高の教員が、18歳で育っているべき資質・能力観や学力観を共有していく必要がある。例えば、小学校と高校では読書感想文を評価するときの観点が異なり、それを共有することは非常に勉強になる。他学校種の教員で研修をすることができれば有効。
- 幼小の連携の観点で、学びの連続性というところだけに目が行くと、誤解も多いのではと懸念。幼稚園、認定こども園、保育所といった多様な就学前の教育・保育施設を考えた上で幼児教育の充実を図っていくとなると、ここには前の学校段階での学びが次の学校段階の中で生かされていくようにというニュアンスが伝わる内容があった方がよいと思う。
- 学校間の連携、接続、教科間の接続などについて、前置きを作り、全体の構造に対する意図図を示してみてもどうか。教科横断と言ったときに、まず教科があってそれを横断するというのではなく、どのような学びをしてほしいかをまず書いて、そうするとおのずと各教科にまたがってこざるを得ないということだと思う。校種についても同じことが言える。
- 各学校種間の縦の構造について、今回、英語で出してもらったような、各学校種を超えた見取図のようなものが大事だと思う。専門課程に進んで、将来それを専門職にしていくとなると、高度な問題解決には領域固有知識の豊富さが圧倒的に重要で、思考力だけでは問題解決できないので、そのバランスを考えた全体の構造の中で、縦の構造をどう考えるかということが大事。
- 全体を通して、18歳までに何を身に付けていくべきかという視点から、幼小、小中、中高という接続の形がいろいろなところに工夫されて記述されているということにとっても感心した。特に幼小に関しては、きめ細かく内容を入れていただけたかなと思う。研修については、実際に授業や実践、幼稚園における実践、小学校における実践等、見合うことがとても大事。実践を見合うような研修の在り方については、接続に関しても非常に重要だと思っている。
- 幼児教育は主体的な活動である遊びを通じて総合的に指導する。課題は幼児がそこで何を身に付けたかを見極める教師の目。小学校の学びにつながるものとして、幼児期に身に付けるべき力を伝えられるような教育課程の在り方を考えたい。
- 今回の教育課程を考える上では、対立すると思っている概念が、実は対立しないということが大事な点ではないか。例えば、幼小連携の議論の中で、小学校以降の教科の学びの芽を

きちんと盤石なものにしようという意図を持ったからこそ、教科内容の前倒しをするのではなく、子供が存分に遊び込み、主体となって、協働的に本格的な暮らしを存分に作ることを大切にする。それこそが、小学校以降の教科の学びの芽になるのだと考えての判断である。昔の考えで言えば、子供が存分に活動すれば知識は付かないというように対立的に考えただろうと思うが、もはや幼小連携の動きはそれを乗り越えてきている。むしろ子供が存分に遊べば遊ぶほど、思考や判断や自己制御やメタ認知、科学的な物の見方などを育てるチャンスは増えることになると考えてきており、これはとても大事なこと。

- 幼小連携が、遊び込むというところに思い切って踏み込んでいけた一つの大きな理由は、幼児期の子供の学びというのはそもそもどういふものか、そして、そこにおいて、幼児期の子供に形成される知識というのはどのようなものかということについての共通した学問的に基礎付けられた認識を持っているからである。小学校以降も含め、人間はどう学ぶのか、人間の知識というのはどういふものかについて、もっと新しい科学的な知識、認識を足場にして何を教えるかという議論をしていく時代ではないか。分かりやすくするが余りに不正確になってしまって、通俗的な概念を足場に教育課程の議論をするのは、また同じ過ちを繰り返すのではないかと危惧している。
- 幼・小の先生方の中で、授業や行事、研究会などの交流が行われ、接続カリキュラムをつくるということも出てきている。そうした幼・小の交流の中で5歳児の姿を捉え直すと、幼稚園での遊びの姿が、これは学習に向かう姿勢として大事だと小学校の先生から指摘されるなど、5歳児の生活の中に、小学校以上の生活や学習の基盤になる学びの芽生えがたくさん見えてくる。5歳から小学校低学年という中に共通の発達の姿というものを見ることができると。こういったことも踏まえて、幼・小のカリキュラムの議論をしていただきたい。
- 幼小連携で子供の成長を考えていくと、5歳児ではかなり学びの基礎のようなことができるのではないかと思う。思考力についても、物を比較することや、関連付けて考えるようなことのトレーニングも幼稚園生でスタートできるのではないか。
- 小学校とのつながりについては、幼稚園での学びの芽生えから自覚的な学びに発展していくという整理。学びの芽生えとは、小学校において、意識して自覚的に意志的に学ぶということの始まりが幼児教育に出ているので、それをしっかり育てようということ。例えば、5歳児において考える力、あるいは子供同士で話し合う力というのは十分育て得るということで、小学校教育の前倒しではないが、小学校教育に発展する芽生えというものが伝わっていることが大事。
- 福井県では、保・幼・小の接続カリキュラムを作成し、「言葉」「数」「自然」「約束」の四つの視点から内容を示している。
- キャリア教育の観点で育成すべき資質・能力を、教員の方からまず育成していくという研修が効果的。その際、小中連携や幼保小中高の連携を重視する必要。
- 小学校のスタートカリキュラムについては、現在、生活科の解説に明記されているのみで、

学習指導要領本体には書かれていないので、しっかりと位置付けていくことが必要。スタートカリキュラムについては、いわゆる小1プロブレムのように、子供が教室に落ち着いて座れないということへの対策として捉えられることが多いが、幼小の接続という観点で見ると、幼児期の教育の成果をいかに生かして小学校教育を充実させるかということが重要。そうした観点から充実を図るとともに、スタートカリキュラムという考え方を1年生の教育、あるいは低学年の教育全体に広げていくということが大事。具体的には、現在、国語と音楽と図工の一年生のところに、幼稚園教育に配慮して教育を進めるという記載があるが、それを全ての教科や時間に広げることが考えられる。また、幼児教育は非常にアクティブで、主体的な学びを大事にしているが、そういう考え方を低学年にも導入し、小学校全体のアクティブな学習の始まりとして、教師が一斉教育を進めるということだけではなくて、子供がグループになり、話し合いながら主体的に学習を進めるというやり方を、いろいろな教科で広げられるとよい。

- スタートカリキュラムについては大いに賛成。現状の感情のコントロールだけではなく、体のコントロールや、他人の痛みやルールを理解することなど規範意識を育てることも幼児教育の段階から入れていくことも重要。
- 小中連携については、教員同士で仲間意識が持ちやすく、また、小から中へという生活のイメージもつきやすく、ここ1、2年でかなりスムーズに進んでいる。一方、幼・保・小の連携については、小学校低学年の教科である生活科がスタートカリキュラムとして重要な役割を果たしている。文科省でも「スタートカリキュラム（スタートセット）」を作成し、全国配布をしているが、まだなかなかその理念が伝わり切れていない。連携がうまくいかない理由としては、幼稚園は私立の割合が高いことや、保育園の場合は行政の管轄が違って声掛けしても一緒に研修会を開くことが難しいことなどが挙げられる。是非、幼・保・小の連携というものもしっかり総則に規定していただき、小学校のカリキュラム・マネジメントの大事な柱として今後対応していただけると有り難い。
- 幼稚園、小学校低学年の子供たちにとって遊びは学びであり、5歳児の遊びの中にいかに意図的に学びの要素を入れていくか、小学校1年生の子供たちの学びの中にいかに遊びや体験を取り入れていくかが重要であり、そのようなつながりを大事にすることが幼小を分断しないことにつながる。
- 幼小の円滑な接続には、行政的な支援も欠かせない。教材の開発や普及のほか、幼・保の教員・保育士希望者が、幼・保のことだけではなく、幼小の連携や学校間の接続ということを学べるような保障も必要。
- 幼小接続及び幼児教育の質の向上には、行政的な関わりが重要。例えば、保育所、幼稚園と小学校の教職員の協力体制の構築や、管理職や行政担当者を対象としたカリキュラム・マネジメント研修などを行政的に保証していくことが重要。特に、平成27年度から幼稚園、保育所、認定こども園を基本的に全て管轄することになった市町村が、幼児教育アドバイザー制度の充実など、幼児教育現場への助言、監督の体制をしっかりと作ることが重要。また、保育士と幼稚園教諭という2つの免許資格が異なるということの弊害は大きい。既に保育教

論という形で免許資格の統合も提言されているので、その点の議論も進めていただきたい。

3. そのほかについて

- カリキュラム・マネジメントは幼児教育の中でも大事と考えており、幼児教育関係者にも注目して読んでもらいたい中で、「学校長」などのみ書かれていたり、教科等の縦割りや学年を超えてという文章で書かれていると、幼児教育関係者はこれは小、中学校のことかなと単純に思ってしまうこともあるので、幼児教育についてもそこはぜひ強調していただきたい。特に幼児教育の場合には、教育課程というものをもって教育目標に向かうという考え方をしっかり持って日々の保育、教育を行っていかないと、修了までに育てたいことが十分に身に付かないということもある。
- 発達障害には、診断されているケースと診断されていないケース、また要件がそろわないので診断まではされないが発達的な偏りがありそれが後の自立や社会参加を難しくさせる要因になるというようなケースがある。そのことを踏まえると全ての学校・学級に発達障害を含めた障害のある子供たちやニアな状態像を持つ子供たちが1割以上在籍することを前提にして、通常学級の中でどう指導していくかということをしかりと書き込んでいく必要がある。ただ受容されるだけで十分なわけではなく、教育的ニーズに応じた適切な指導がないと社会参加や社会適応が難しくなってくる可能性がある。現状でも丁寧な指導やその子の状態像を理解し受け入れるということはかなり広がってきている。しかしながら、どれだけ理解されても、体力や学力などといったベーシックスキルから衝動性や攻撃性のコントロール、ルールや倫理、マナーなど将来の自立と社会参加を視野に入れたトレーニングが受けられず、具体的なスキルになっていなくて不適応を起こしてしまっている若者が少なくない。現状のように、理解と受容ばかりではますます不適応を起こす社会人が増えていくのではないかとことを危惧している。一方で、例えば、小学校1年生3学期と2年生の2学期の段階で全ての子供に聴写テストを行い、その分析を生かして指導し効果を上げている自治体がある。また、中学校1年生の段階で、読みや社会性はどうかという文科省の特別支援教育の実態調査に使われたアンケート調査を実施し、そこで上がってきた気になる生徒にはLDI-RやWISC等の検査を行うことによって指導に生かすなど、学習障害のある子供や障害の有無にかかわらず未学習不足学習の子供の指導をニーズに応じて始めることで成果を挙げている学校もある。幼小連携で発達課題のある、あるいはあるかもしれない子供の早期指導を、個別及びクラス（学校）全体で行うことで全ての子供への指導成果を上げている自治体もある。こういったことは全国的にやるべき。
- 幼児教育全体の質の向上という視点から、認定こども園や保育所における幼児期の教育も充実するような方向で、改善の視点を盛り込んでいただきたい。特に幼・保・小の連携については、就学前の子供たち全体が視野の中に入ってくるような支援が必要。教育課程の基準の中に「子育て支援」が入っているのは幼児教育独特のことであり、この意味は非常に大きいと考える。子育て支援というと、園の側から家庭や地域に支援の手を差し伸べるような視点に受け止められるが、成功している実践を見ると、子育て広場のような場で、園に通う子供の保護者と未就園の子供の保護者の交流が行われていたり、小学校の保護者が幼稚園の保

護者の相談にのり、就学前の不安を解消したりといった、保護者同士のつながりが強く、それが園や学校のいろいろな取組を支えているというパターンである。もっと積極的に地域の子育てを活性化し、地域の人材を育てていく観点から、子育て支援の充実は非常に大事。